

大学の地理学事情 地理が好きですか？

駒澤大学名誉教授 中村和郎

地理を意識させるための質問事項

大学へ進学して地理学を勉強しようかなと迷っている人のために、次のような質問項目を作ってみました。ここでは省略するが、どの項目についても⑤～①の5つの選択肢を作って1の例の要領にしたがって一つを選ぶことにする。

1. あなたは地理が好きですか？
(選択肢の例)
 - ⑤どの科目よりも地理が好きだ。
 - ④ほかの科目にも好きなものがある。
 - ③好きでも嫌いでもない。
 - ②嫌いな科目のうちの一つである。
 - ①いちばん嫌いな科目である。
2. 小学校、中学校、高等学校での地理の授業は楽しかったですか？
3. 自分が住んでいる（いた）ところに愛着を感じますか？
4. 知らない土地のことをテレビなどで見たり、本で読んだり、他人の話を聞いたりすることが好きですか？
5. 旅行（ハイキング、登山など）をするのが好きですか？
6. 乗りもの（電車、自動車、飛行機、船など）に興味がありますか？
7. 地図をよく利用しますか？
8. 環境に関する諸現象や諸問題に関心がありますか？
9. 国と国との関係や、地域や都市などの変化に興味がありますか？
10. グローバル化する諸現象や、反対に、ある地域だけにみられる諸現象などに関心がありますか？

11. コンピュータを使って計算したりグラフや地図を作ったりすることが好きですか？

さて、選択した⑤と④の数はいくつあったらうか。この数が多い人は大学へ進学して地理学や地理学と関連の深い科学の勉強を志すのもよい。ただし、地名をたくさん知っているだけの人は、専門分化が進んだ大学では満足が得られないかも知れない。

逆に、②と①の多い人が地理学に向かないかといえば、そうとはいえない。地理が嫌いだったのに、社会に出てから地理の重要性に目覚めて活躍している人は、学者に限らず大勢いる。

「なーんだ、そんなことならこんな質問は意味がないではないか」と思われるかもしれないが、地理を意識してもらうための自己診断である。

大学のどこで地理学を学ぶことができるか？

今では多くの大学で改組が行われるなどして、学科や専攻名を見ただけでは地理学を学ぶことができるかがわかりにくくなっている。文学部史学科でも地理学専修とか地理学コースとあればいいが、史学科超越文化学専修、文化学部比較文化学科などという名称だけではわかりにくい。

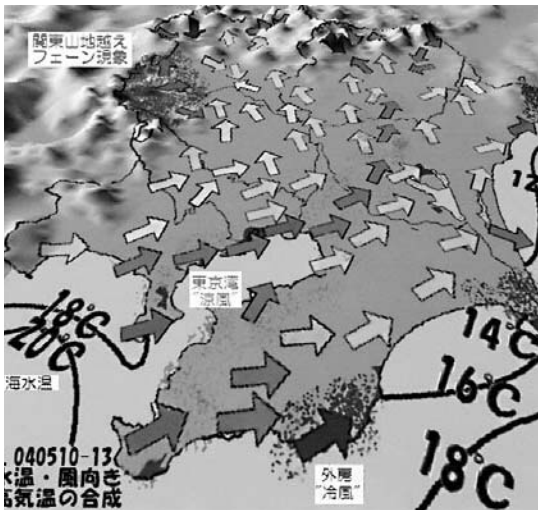
一般の書店でも市販されている雑誌『地理』（古今書院、月刊）の2006年5月号から11月号に「大学で地理学を学ぼう！」というタイトルで、全国「地理学が学べる大学」リストが掲載されている。ここには大学ごとに地理学が学べるコース、専任スタッフとその専門分野、おもな地理学関連講義などが一覧できるようになっている。これを参考にインターネットで調べるとよい。

地形学、気候学、都市地理学、工業地理学などというオーソドックスな講義のほか、人間社会の

地理学、むらおこし論、自然災害論、暮らしの環境と地図など具体的に内容がわかる講義名もあり、地誌でもドイツ、カナダ、マレーシア、シルクロード地域などと大学によって特色があることがわかる。自分の関心がはっきり決まっている人は、このような資料を参考にして大学を選んでほしい。

近年、ますます多くの大学で力を入れてきているのはGIS教育である。さまざまな内容の大量のデータをコンピュータに蓄積して、それを分析したり、地図やグラフを作ったりする。何種類もの主題図を重ね合わせて関係を考えることもできるし、三次元地図や動画を作ることもできる。目に見えない現象を見えるようにすることもできる。以前ならばカルトグラファーとよぶ専門の技術者がやっていたことをだれもがやれるようになってきている。また、社会でもそのような能力を持った人材を求める時代になってきている。

下の図は地理学を専攻して気象予報士として活躍している平井史生さんが大学の講義で学生に配布した、関東地方のフェーン現象を解説するための地図である。この地図を作るのにもいろいろなテクニックが使われているのがわかる。



平井さんは起こったばかりの気象現象の生のデータを学生たちに与えて、予報につながる知識と技能を学ばせようと工夫している。

(大学の講義で配布した資料：平井史生作成 より)

地理学が就職に役立った！

地理学を専攻して教員になることがきわめて難しくなった昨今、学生たちは一般企業を受けようとするのだが、そこで地理学が認知されていないことをいやというほど思い知らされる。でも、こんな例がある。

ある不動産会社の面接で、控室にあった空中写真を手にとって実体視して面白がっていたら、「君は写真が読めるね」と言われて採用が決まった。

実習の時間に自分が作った自慢の地図を見せてセンスと技能を認めさせた人もいる。

並みいる経済学部出身者を押しつけて銀行に採用された女性は、「野外調査で何度も聞き取りを経験したことがよかったのかな」と振り返る。

理工系の技術者ばかりの会社に入って、肩身の狭い思いをしていた文学部出身の女性は、都市計画の設計図をひいている人たちを見てふと「その現場に行ってみない」とつぶやいた。それがきっかけになって技術者たちは現場を知らずに図面を描いていたことを反省することになった。

「地理を意識する習慣」

1987年にアメリカ議会の上下両院は、国を挙げて地理教育をさかんにしようという合同決議を可決した。アメリカ合衆国は世界的な諸問題にかかわりをもち、地球規模で影響力をもつ。だから世界各国の国土、言語、文化に対する理解を深めなければならない。将来国家間の相互関係が増すなかでそれに堪えうる市民を育てるには世界地理の知識が重要な役割を果たす、というのである。それ以後、毎年11月後半に「地理を意識する週間」が設けられて、テレビで地理的な番組が放映されたり、各地の大学の地理学教室が研究成果を公開するなどのイベントを行ったりしている。

日本でもこのような認識をもちたいものである。一人ひとりが日常生活であれ、社会問題や環境問題であれ、政治経済の問題であれ、地理を意識して考えてみる習慣をもつように心がけることにしよう。